鳥取短期大学研究紀要第44号(2001)

保育者養成課程における音楽教育の現状と課題
～日本とドイツの学生における意識調査をもとに～

羽根田　真　弓

Mayumi Haneda：The Present Condition and Future Mission for Music Education of Pre-school Training Teachers
—Difference between Japanese and German Students—

はじめに

児童を取りまく環境の著しい変化によって、高い専門性と多様なサービスに対応することのできる資質が保育士の養成に求められるようになった。このため、保育士養成課程の見直しが検討され、時代のニーズに対応する科目の強化や選択科目の大綱化が図られた。このような背景において、音楽科目は圧縮されてしまった。これは、教育職員免許法の改正にともなう結果と同様である。

したがって、保育者養成における音楽教育は時代の変遷とともに模索し、検討せざるをえない時期を迎えている。音楽科目の授業時間が削減される傾向にあるなかで、今後の音楽教育をどのように展開していかなければならないのか、音楽の担当者としてその課題は大きい。

筆者は、これまで保育者の音楽的資質の向上に資するテーマを追究してきた。しかし、保育士養成課程の見直しによる策定、かつ、幼稚園教諭養成課程における音楽科目の圧迫に対して、今後の音楽教育の方向性を明確に示す必要がある。

そこで、本稿では学生の音楽科目への意識を取りあげる。学生の意識調査をもとに音楽教育の現状を捉え、同時に課題となる要因を見いだしながら、今日の音楽教育の問題点として提示する。

Ⅰ　調査の目的と概要

筆者は、従来、ドイツの幼稚園および保育者養成機関の音楽教育について事例報告してきた。[註1)]そして、ドイツと日本の大きな相違は、ピアノへの依存度であることはすでに述べた。つまり、ドイツの保育施設ではピアノはほとんど設置されることはなく、したがって保育者養成機関においてもさまざまな楽器が学生によって選択され、それらが保育の現場に浸透している。

ところが、わが国の現状は、保育者養成課程においてピアノの演奏技術習得は必修化されている実態にあり、保育現場と負の相乗効果を生みだしている。

このように異なる実態であるが、保育者を目指す学生たちは音楽教育をどのように捉えているのであろうか。ドイツと日本において学生の意識調査を実施した。この結果をもとに、それぞれ比較考察しながら保育者養成のための音楽教育を検討したい。この目的において、実態調査について報告する。

調査は、鳥取短期大学幼児教育学科１年生135名

表1　調査概要

対　象	鳥取短期大学幼児教育学科	
	1年生	135名
	2年生	96名
	Fachakademie für Sozialpädagogik	
	1年生	86名
期　間	2001年6月	

（男子20名、女子115名）と2年生96名（女子のみ）、ドイツではFachakademie für Sozialpädagogikの1年生86名（女子のみ）を対象に、2001年6月に実施した。（表1）方法は、質問紙による自由記述方式で、筆者がいずれも配布および回収した。

内容は、次の5項目である。

1）入学前に楽器の習得経験があるかどうか。習得経験がある場合、どのような楽器を習得したのか、またその期間。

2）保育者として、楽器の演奏は必要条件か否か。それぞれの理由。

3）歌うことが好きか否か。それぞれの理由。好きな場合、どのような歌が好きか。

4）保育者を目指すうえで、音楽教育は必要か否か。それぞれの理由。

5）将来、保育者としてどのように音楽を活用したいか。また、子どもたちとどのように音楽を楽しみたいか。

これらの項目に加えて、ドイツでは音楽早期教育の経験の有無と、現在選択している楽器についても調査した。（付録1）

Ⅱ　結果と考察

1．鳥取短期大学幼児教育学科1年生

1）入学前に楽器の習得経験があるかどうか。習得経験がある場合、どのような楽器を習得したのか、その期間。

全体の73%（99名）が楽器の習得経験を持っている。男子学生の35%（7名）と女子学生の80%（92名）である。

楽器の種類は、男子学生では3名がピアノを習っており、その他の楽器はギター、ユーフォニアム、和太鼓、打楽器、トランペットである。女子学生では、77名がピアノを習っており、11名が電子オルガン、6名がトランペット、4名が打楽器、2名がフルートとクラリネット、チューバ・ユーフォニアム・トロンボーン・バス・チェロ・アコーディオン・琴・和太鼓がそれぞれ1名である。

2）保育者として、楽器の演奏は必要条件か否か。

全体の80%（108名）が必要であると回答した。これは、いずれかの楽器の習得経験がある学生の82%（81名）と、習得経験がない学生の75%（27名）である。また、男子学生の70%（14名）と女子学生の82%（94名）である。

なお、楽器の習得経験がある男子学生をA群・女子学生をB群、楽器の習得経験がない男子学生をC群・女子学生をD群と分類し、楽器の演奏を必要条件とする理由は、それぞれ次のとおりである。自由記述のためにあくまでも原文で表し、（　）の数字は回答者人数を表す。

〈A群〉

子どもは歌を歌うことが好きだから/リズムをとったりするため/音をとるためにある程度は必要/楽器の種類にこだわることはないが、楽器とともに歌うことは楽しい/CDとちがって、速さの調節ができるから/子どもたちに音楽とふれあう楽しさを教えるため/子どもの情操の発達、表現力の発達

〈B群〉

楽器で演奏したほうが、歌の感じがつかめて音もとれるので楽しい（9）/みんなで楽しめる（6）/興味をひくため（5）/リズム感を養う（4）/子どもに演奏の楽しさを教えるため（2）/子どもが歌を歌う時に必要（2）/楽器でコミュニケーションがとれるから（2）/子どもに音楽を聞かせたり、歌ったりすることで感性がのびる（まま）/子どもに音という楽しさを教え、みんなとあわせた時のすばらしい音を教えたい/声だけでもよいが、音があればさらに楽しい/音楽にあわせて、子どもと一緒に歌ったり踊ったりするから/楽器があったほうが、曲が楽しいものになる/子どもたちと歌う時に、楽器があればその歌をリードできる/子どもたちと一緒にリ

ズムをとることで一つになれる/歌を歌ったりするときに弾むし、明るくなる/子どもに歌やダンスを教えることによって楽しさを覚えさせる/アレンジとか楽しくなる/音楽を使って、幼児に表現力を学ばせたい/楽器は人を自然と楽しませる効果がある/楽器がなければ寂しい感じがする/音楽をより楽しむため/歌だけでなく、楽器を使うことで曲の表現が広がる/音楽で子どもと交流したい/一緒に演奏できる/音をとおして子どもたちに伝えられるものがある/音を自分で作り出し、音を楽しむことを教えられる/音楽があったほうが、子どもたちと接しやすい/ピアノ伴奏があったほうが歌いやすい/音楽の楽しみを教えるには、歌だけではなくその他の楽器も必要/異国や日本の文化を伝えるため/楽器をとおして、子どもたちの友情のつながりが大きくなる/いろいろな音で自分を表現できる/楽器を演奏することで、より音楽の楽しさを伝えることができる/楽器を演奏することで、子どもに音楽を伝えることができる

〈C群〉

歌ったり、踊ったりする時に必要/保育の幅が広がり、子どもたちはより多くの経験をする/音楽をとおして、相手とうちとけやすくなる/楽しくなる/子どもたちと音楽を楽しむうえでの道具の一つ/音を聞くにはどんな楽器にしても大切/子どもに正しい音程で歌ってもらうため/子どもたちに音楽の楽しさ、楽器の楽しさを知ってもらうため/いろいろな音を奏でる楽器に触れてもらいたい

〈D群〉

子どもたちと一緒に楽しむため（5）/楽器をとおして子どもたちと仲良くなれる（2）/子どもたちに楽器への興味を持ってほしい（2）/音をとおしてコミュニケーションを図る（2）/子どもたちに音楽の楽しさ、楽器のおもしろさを教える/子どもの感受性を育てる/心が豊かになり、心がなごむ/子どもと歌を歌うため/楽器があったほうが歌いやすい/音楽の楽しさを教える/楽器を使うとその場が明るくなる/リズム感を養う

一方、楽器の演奏を必要としない回答は、全体の20%（27名）であった。このうちの18名は楽器の習得経験者である。また、男子学生の30%（6名）と女子学生の18%（21名）である。

楽器の習得経験がある男子学生をE群・女子学生をF群、習得経験がない男子学生をG群・女子学生をH群に分類し、楽器の演奏を必要としない理由は、それぞれ次のとおりである。

〈E群〉

楽器を弾くことより、歌うことが大切

〈F群〉

必然ではない（6）/楽器がなくても歌うことはできる（3）/楽器を演奏することより、歌うことが大切/楽器で演奏しなくても声がある（2）/他の方法でも楽しむことができる/散歩に行った時に、みんなで口ずさむ程度でも十分/楽しむ心があればそれでよい/楽器ができなくても音楽はできる（まま）/楽器だけがコミュニケーションをとるために必要なことのすべてではない（まま）/楽器があつかえるだけが教員ではない/楽器が弾けるだけでは意味がない/ピアノや楽器があると音が正しくとれて音楽としてはよくなるが、子どもとふれあうには必要ない/楽器がなくても手拍子でやればよい/楽器という既製品を使わないで、想像力を育てる

〈G群〉

無理に楽器を演奏しなくても保育者になれる。楽器の演奏ができれば、子どもとの距離が短くなる/楽器以外にも体で表現できることを知ったから/音楽をとおして会話する考えもあるが、それよりも言葉もしくは肌と肌のふれあいのほうが大切/最高の楽器は人間の声。歌が歌えればよい

〈H群〉

楽器がなくても子どもたちと一緒に歌うことができる/声、手を叩いたり、足をならしたり、体でリズムをとることができるので必然ではない

3）歌うことが好きか否か。

全体の91%（122名）が歌うことが好きであると回答した。男子学生の95%（19名）と女子学生の89%（103名）である。

また、歌うことが好きであると回答した122名のうち、81%（99名）が項目2で楽器の演奏は必要であると回答している。

嫌いであると回答した理由は次のとおりである。

高音がでない（3）/へた（2）/人前で歌うことが嫌い/歌が得意ではない/上手ではないので恥ずかしい/音がはずれる/音痴/自分の声が嫌い/歌っていても楽しくない/音程がわか

らない

4)保育者を目指すうえで、音楽教育は必要か否か。

全体の94%（126名）が必要であると回答した。必要ではないと回答したのは、男子学生1名と女子学生7名の計8名である。

必要とする理由は次のとおりである。

音楽によって、子どもの表現力や表情を豊かにする（13)/歌は子どもと一緒に楽しめる（10)/心を豊かにする（4)/子どもたちとコミュニケーションがとれる（4)/保育者にとって楽器の演奏は必要（4)/歌の楽しさを教えるため（3)/正しい知識が必要（2)/わからないけれど必要（2)/音楽で子どもたちを楽しませることができる（2)/子どもにたくさんの歌を覚えてほしい/音楽によって人間関係が豊かになる/いろいろなことが表現できる/子どもにダンスや音楽の楽しさを教えるため/歌ったり、演奏して子どもの手本にならなければならない

一方、必要としない理由は次のとおりである。

したい人だけすればよい/簡単なピアノ伴奏ができればよい/詳しく学ぶ必要はない/教育しなくても自然と入ってくる/楽典を子どもに教えるわけではない。いろいろな歌を歌ったりするほうがよい/音楽が嫌いな子どももいるので、そのような子どもに対して強制的にさせることになる

5）将来、保育者として音楽をどのように活用したいか。また、子どもたちとどのように音楽を楽しみたいか。

歌ったり、踊ったりする（47)/楽しく（23)/楽器を一緒に演奏する（11）/一緒に歌うことによって協調性をたかめる（5）/音楽を使って体を動かす（4)/コミュニケーションとして活用（3)/歌をたくさん教えたい（3)/元気に明るく（3)/子どもの心を一つにする（2)/子どもたちと音楽の楽しさを共感する（2）/生活の一部として（2）/演奏会、交流会（2）/ゲーム、指遊び（2）

2．鳥取短期大学幼児教育学科2年生

1）入学前に楽器の習得経験があるかどうか。習得経験がある場合、どのような楽器を習得したか、その期間。

全体の75%（72名）が楽器の習得経験を持っている。そのうちの83%（60名）がピアノであり、その他の楽器は電子オルガン14名、クラリネット7名、トランペット4名、ホルン3名、ギター・オルガン2名、バイオリン・琴・ドラム・アルトサクソフォーン・ユーフォニアムがそれぞれ1名である。

2）保育者として、楽器の演奏は必要条件か否か。

全体の81%（78名）が必要であると回答した。これは、いずれかの楽器の習得経験がある学生の83%（60名）と、経験がない学生の75%（18名）である。

楽器の習得経験がある学生をA群、習得経験がない学生をB群と分類し、楽器の演奏を必要とする理由はそれぞれ次のとおりである。

〈A群〉

楽器を取り入れたほうが楽しく歌える（15)/リズムがとりやすい（10)/歌いやすい（6)/楽しくなる（4)/歌ったり踊ったりできる（2)/楽器を演奏することで子どもの感性を豊かにする（2)/子どもたちの興味をひきつける（2)/子どもの表現を引き出す（2)/楽器がないと音がとりにくい（2)/楽器によって音楽の楽しさを教える/楽器を演奏する楽しさを教える/ピアノ等の楽器をもちいたほうが、歌だけよりも表情がつく/子どものリズム遊びのため/楽器によって、子どもとのコミュニケーションが一層楽しくなる/歌うことだけではその曲の雰囲気がでない/歌を教える時に便利/ピアノはテンポを速くしたり遅くしたりすることができる/音がたくさんふえておもしろい/保育者がより表現できる

〈B群〉

一層楽しくなる（9)/音がとりやすい（2)/リズムがとれる（2)/子どもが歌を覚えやすい/音への興味を引き出す/曲にはいりやすい/体を動かしやすい

一方、楽器を演奏する必要がないと回答した理由は次のとおりである。楽器の習得経験を持つ学生をC群、習得経験を持たない学生をD群と分類する。

〈C群〉

自分の声で十分。手や足でもリズムはとれる（3)/それぞれ得意、不得意な分野がある。音楽専門、運動専門の先生にわける（2)/楽器の演奏がすべてではない（2)/楽器がなくても歌で伝わる/楽器だけが音楽ではない

〈D群〉

ピアノでなくても音楽に変わりはない/ピアノを弾かなくても歌は歌える/難しい歌を歌うのではない/保育者全員が弾けなくても、何人かが弾ければよい/ピアノが弾けないと保育者としての適性がないことになる

3）歌うことが好きか否か。

全体の79%（76名）が歌うことが好きであると回答した。これは、項目2で楽器の演奏は必要条件であると回答した学生の77%（60名）と、必要ではないと回答した学生の89%（16名）である。

また、歌うことが嫌いであると回答したのは全体の21%（20名）であり、その理由は次のとおりである。

下手だから（7)/苦手だから（3)/人前で歌うことは好きではない、恥ずかしい（3)/音痴（2)/音程がとれない（2)/自分の声に自信がない/高音がでない/自分ではきちんと歌っているつもりでも、他人にはどのように聞こえているのか不安

4）保育者を目指すうえで、音楽教育は必要か否か。

全体の96%（91名）が必要であると回答した。（無回答1名）

必要とする理由は次のとおりである。

いろいろな歌を子どもたちに教えられる（17)/一緒にいろいろな歌を歌いたい（5)/音楽で子どもたちとコミュニケーションがとれる（4)/子どもの表現力や想像力を養うことができる（4)/リズム感を養う（4)/子どものリズム感を養う（3)/子どもたちと音楽を楽しむには知識が必要（3)/子どもを音楽にふれさせることが必要（3)/音楽にあわせて歌ったり、踊ったりすることは楽しい（3)/一緒に音楽で楽しむ（2)/体を動かしたり、歌ったりすることで仲間作りができる（2)/保育において、歌や遊戯は必要（2)/気持ちを表すことができる（2)/楽しい/自由に曲を作ったりすることができる/いろいろな場面に対応できる力が必要/音楽は生活のいろいろな場面にある/それぞれの年令の発達にふさわしい音楽を知る/音楽はその場を和ませ、明るくする/子どもが歌う時に楽器があったほうが歌いやすい/音があったほうがよい/子どもに演奏してあげる/保育者には歌が重要/子どもの教育には音楽が必要/童謡を知る/保育の現場でピアノが必須/保育者自身が音楽をとおして自分を表現する/季節や行事にあった歌を歌う/より楽しいことを子どもたちに伝えることができる/子どもたちがいろいろな経験をする

一方、必要ではない理由は次のとおりである。

音楽教育を受けなくてもあたりさわりない/好きな楽器を自由に弾き、歌えばよい/歌のおもしろさを伝えればよい。楽典は必要ない

5）将来、保育者として音楽をどのように活用したいか。また、子どもたちとどのように音楽を楽しみたいか。

項目4で、音楽教育が必要であると回答した学生は次のように回答している。

歌ったり、リズムに合わせて体を動かして楽しみたい（15)/子どもたちと一緒に歌を歌う（13)/いろいろな楽器を使って音楽を楽しみたい（8)/歌、音楽をとおして子どもたちとコミュニケーションを図りたい（5)/日常生活の中に音楽を取りいれたい（5)/季節や行事に合わせて歌を歌いたい（4)/手作り楽器を作りたい（4)/子どもと一緒に体を自由に動かす（4)/毎日1回は歌を歌う（2)/音楽で保育者と子どもの信頼関係を築く（2)/一人一人が楽しいと思えるように（2)/自然と歌を口ずさむ（2)/一緒に楽しむ/手遊びや体を使った遊びを楽しむ/心や体を動かすきっかけを作る/音楽を聞いて感動したり、一緒に楽しむ/音楽で始まり、音楽で終わる（朝、お帰りの挨拶)/歌の楽しさを教える/遊びや運動と合わせて音楽を活用したい/音楽で自分を表現させたい/リラックスできる環境を作る/いつでも明るく/体全体を使って教える/子どもの感性を磨く/強制することなく、自由に表現させる/発表会で活用する/音の出るおもしろさを教える

また、音楽教育が必要ではないと回答した学生たちの回答は次のとおりである。

朝、帰りに歌を歌いたい/子どもたちと心をかよわせるために音楽を活用したい/音楽を遊びとして楽しむ/一緒に楽しむ/歌ったり、踊ったりする

3．Fachakademie für Sozialpädagogik（ドイツ・ミュンヘン）

幼稚園教諭を養成する3年制の専門学校である。

１年生210人のうち、86名の調査を行うことができ、86名全員の回答を得た。回答者は全員が女性であり、年代構成は19才が20名、20才代が56名、30才代が５名、40才代が２名である。(無回答３名)

音楽授業科目は表２のとおりである。

２年次の「楽器」は選択であり、およそ30％の学生が継続して履修している。また、１年次の「楽器」の単位が取得できない場合は、１年次のすべての科目を再履修しなければならない。

項目１に関連して、ミュンヘンでは音楽早期教育（Musikalische Früherziehung）の経験有無についても調査した。日本の場合、そのほとんどがピアノによる幼児の個人レッスンが一般的である。しかしながら、ドイツでは音楽早期教育が４歳児から６歳児を対象にして、音楽学校（Musikschule）で行われる。この音楽早期教育を受けた後、子どもたちはそれぞれの意志で楽器を選択する[註2)]。

回答者のうち、50％がこの音楽早期教育を受けており、19才と20才代のみであった。

それぞれの項目の回答は以下のとおりである。

１）入学前に楽器の習得経験があるかどうか。習得経験がある場合、どのような楽器を習得したのか、その期間。

回答者83名のうち、66％（55名）が楽器の習得経験を持っていた。このうちの67％（37名）は音楽早期教育の経験者である。

音楽早期教育を受けた経験を持つ学生が習得した楽器とその期間は表３のとおりである。また、表４は音楽早期教育を受けていない学生が入学前に習得した楽器とその期間である。（　）は人数である。

これらの楽器の習得経験者(表３と表４)が現在、選択している楽器と人数は表５のとおりであり、（無回答２）表６は、楽器の経験を持たない学生が入学後に選択した楽器と人数を表している。

２）保育者として、楽器の演奏は必要条件か否か。

全体の73％（63名）が必要であると回答した。その理由は次のとおりである。

子どもの歌の伴奏をすることができる（25)/子どもたちと一緒に演奏する（musizieren）ことができる（６)/子どもたちにメロディとリズムを教えることができる（４)/子どもたちを感動させ、夢中にならせることができる（４)/音楽早期教育（３)/すばらしい雰囲気をつくることができる（２)/子どもたちの興味を引きつける（４)/子どもたちに音楽を親しませることができる（２)/音楽によって子どもたちに多くのことを教えることができる（２)/音楽教育を促す（３)/楽器は子どもたちの創造性と音楽性を豊かにする/知られていない歌を子どもたちに紹介することができる/音楽はファンタジーを刺激する/歌うことを促す/音楽教育は身体と精神のために重要である/すべての保育者が上手に歌えるとは限らない。そのために楽器は実際に役立つ/変化、気分転換/子どもたちの心に訴える/子どもたちをより音楽的に導くことができる/子どもたちを楽器に親しませる/音楽は人間生活における基本であり、前提条件である/子どもが音楽とふれあうこ

表２　音楽授業科目

科　目	履修年次	時　間	必修・選択
音楽教育	１・２年	90分	必修
リトミック	１年	45分	必修
楽器	１年	45分	必修
楽器	２年	45分	選択

表３　音楽早期教育経験者による習得楽器

フルート	16人	９年（２）５年（４）４年（３） ３年（３）２年（３）１年（１）
ギター	13人	９年（１）６年（２）５年（２） ４年（２）２年（６）
ピアノ	10人	９年（１）６年（２）５年（３） ４年（１）３年（２）１年（１）
リコーダー（Blockflöte）	８人	14年（１）６年（１）５年（１） ４年（２）２年（２）１年（１）
ダルシマー（Hackbrette）	３人	６年（１）４年（１）３年（１）
キーボード	３人	５年（１）３年（１）２年（１）
サクソフォーン	３人	７年（１）３年（１）１年（１）
クラリネット	２人	11年（１）７年（１）
オルガン	１人	２年
アコーディオン	１人	８年
バイオリン	１人	７年
グロッケンシュピール（Glockenspiel）	１人	２年

表4　音楽早期教育未経験者による習得楽器

フルート	3人	1年（4）4年（2）
ピアノ	3人	1年（2）6年（1）
ギター	3人	7年(1)5年(1)2年(1)
ダルシマー	2人	3年（1）2年（1）
打楽器	1人	1年
アコーディオン	1人	4年
チェロ	1人	2年
キーボード	1人	3年
リコーダー	1人	4年
シロフォン	1人	1年

表5　楽器習得経験者が現在、選択している楽器

ギター	28人
打楽器	9人
フルート	6人
ピアノ	4人
オルフ楽器	2人
サクソフォーン	1人
リコーダー	1人
アコーディオン	1人
ドラム	1人

表6　楽器の未経験者が入学後に選択した楽器

ギター	19人
打楽器	4人
オルフ楽器	2人
コンガ	1人
シロフォン	1人

（無回答1）

とは重要である/保育者は最小限の音楽教育を子どもたちにしなければならない

また、全体の27%（23名）が必要ではないと回答し、その理由は次のとおりである。

チームで補うことができる（6）/楽器の伴奏がなくても子どもたちと歌うことができる（2）/歌うこととオルフ楽器で十分である/ある程度歌うことができれば、楽器の演奏は絶対ではない/保母（Kinderpflege）が行う/保育者（Erzieher）にとって必要ではない。音楽に興味があれば教えることができる/音楽教師（Musikpädagoge）が行なう/手を叩いたり、手を打ったり、足をならして伴奏することができる/子どもたちに楽器を教えることが課題ではない。しかし、音楽は毎日の生活で欠かすことはできない/音楽の分野以外にも他の能力があり、評価できる/誰もが音楽的とは限らない。できることを行う/日課として必要がない

3）歌うことが好きか否か。

全体の83%（69名）が好きであると回答した。嫌いであると回答した学生の理由は次のとおりである。

上手に歌うことができない（9）/実科学校（Realschule）で嫌いな先生がいたから/正しく歌うことができない/歌うことが好きではない/歌うことに興味がない

4）保育者を目指すうえで、音楽教育は必要か。

全体の94%（81名）が必要であると回答した。その理由は次のとおりである。

子どもたちを音楽に親しませるためのさまざまな方法を学び、予備知識を身につける（7）/音楽基礎知識を得る（5）/子どもたちに多くのことを教える（4）/知識があれば、子どもたちに正しく教えることができる（3）/子どもたちは歌うことが好きである（2）/リズム感を養う（2）/音符を読むことができ、楽器で伴奏しながら歌を教えることができる（2）/子どもたちにわかりやすく歌を教えることができる（2）/実習に役立つ（2）/伴奏したり、子どもたちと歌を歌うため（2）/より多くの子どもの歌を学ぶ（2）/子どもの才能をのばす/子どもたちは、音楽によって自分の気持ちを自由に持つことができる/音楽教育は身体と精神のために重要である/音楽は命である/音楽は生活を豊かにする/歌、遊び、動きを学ぶため/子どもたちと演奏するため/人生にとって音楽は大切である/人間にとって音楽は重要な領域である/子どもにとって音楽は重要である/音楽が好きな子どもがいる/楽器にふれることは大切である/子どもたちと演奏するためには基礎知識と経験が必要である/音楽の基礎を教える/子どもは音楽が好きである/子どもの音楽的要求に応じる/子どもたちのために演奏できる/子どもの発達において重要である/子どもたちにより多くの可能性を教える/音楽がきっかけとなって、多くのことを応用できる/子どもたちに音楽の喜びを伝える/棒楽器（Stabinstrumenten）で伴奏することができる

また、必要ではないと回答した理由は、次のとおりである。

興味があれば、選択すればよい/重要ではない/絶対に必要で

はない

5）将来、保育者としてどのように音楽を活用したいか。また、子どもたちとどのように音楽を楽しみたいか。

音楽教育が必要であると回答した学生は、次のように回答した。

子どもたちと一緒に歌う（15)/子どもたちが多くの楽器を経験する（14)/音響効果をともなった物語（9)/オルフ楽器を伴奏して歌う(8)/ギターで伴奏して歌う(8)/伴奏する(7)/自由に、強制しない（6)/動きを伴う歌（6)/リトミック（5)/ダンス(5)/楽しく喜びをもって(4)/歌とダンス(4)/さまざまな楽器の試み(3)/楽器をつくる(3)/歌遊び(3)/グロッケンシュピールで伴奏して歌う（2)/リズム感の発達（2)/トライアングルで伴奏して歌う/フルートで伴奏して歌う/棒楽器（Stabinstrumenten）で伴奏して歌う/からだ楽器で伴奏して歌う/伴奏なしで歌う/太鼓を叩く/すべての表現をしながら遊ぶ/教室で輪になって行ったり（Stuhlkreis)、行事の舞台で/週に1～2度、一緒に楽器の演奏をする

また、音楽教育を必要としない回答者のうち２名は、音楽を全く活用しないと回答し、１名が音楽は重要であるが、喜びがともなわなければならないと回答した。

項目１では、次のようにそれぞれ比較することができる。

入学前の楽器の習得経験は、ドイツの学生よりも鳥取短期大学の学生のほうが多い。（図１）その差異は決して大きくはないが、楽器の種類に大きな相違があることは述べるまでもない。つまり、わが国ではピアノに集中している実態である。鳥取短期大学の場合、学生のおよそ74％が楽器の習得経験を持ち、そのうちのおよそ82％の学生が習得した楽器はピアノで占められている。しかも、ピアノの習得経験を持つ学生が多いにもかかわらず、習得期間が短いことが一つの特徴になっている。低年齢の時期から習得する傾向にありながら、小学校のみ、もしくは中学校１年生までの習得期間のパターンがもっとも多くみられた。今回、幼児期から現在まで継続しているピアノ習得者は５名であった。

一方のドイツでは、すでに述べたように幼児のはじめての音楽経験は音楽早期教育であり、その後に楽器を選択して習得を始める。今回の調査では、音楽早期教育の経験を持つ学生の86％が何かしらの楽器を習得していた。

１年次の必修科目「楽器」では、学生は自由に楽器を選択して習得することができる。表５と表６に見るように、ギターを選択する学生が圧倒的に多く、子どもたちと一緒に歌うことができ、持運びが便利であることがその理由である。この他にも打楽器、サクソフォーン、フルート、リコーダーなどさまざまな楽器が学生によって選択されており、これらのレッスンは６人前後のグループレッスンの形態で行われている。なお、ピアノとバイオリンの選択は、入学前の習得経験が条件となっている。

このように、保育者養成課程においてさまざまな楽器が選択可能であるように、ドイツの保育現場ではあらゆる楽器が保育者によって用いられている。なかでもギターはもっとも一般的である。

項目２では、ドイツの学生の多くが、子どもたちの歌の伴奏をするために楽器の演奏が必要であると回答した。これは、彼らが自由に楽器を選択できる課程によってもたらされる結果ではなかろうか。つまり、個人の意志で楽器を選択するために、楽器に対する学生の意識が主体的に働いているものと考えられる。そのために、伴奏の形態となって保育現場において効果的に楽器が導入されるものと考える。

このことに対して、鳥取短期大学学生の伴奏に関する意識は低い。これは、ピアノの演奏技術が求められているわが国の実態において、ピアノで伴奏しなければならないという潜在的な意識がこのような結果をもたらしたと考えられる。むしろ、楽器をともなうことによって楽しくなりたいという学生の意識は、保育者養成課程におけるピアノへの偏向によって生じているのではなかろうか。つまり、楽器を演奏することへの学生の主体性が欠けて、そのために楽器への依存度が高いと考えられる。すなわ

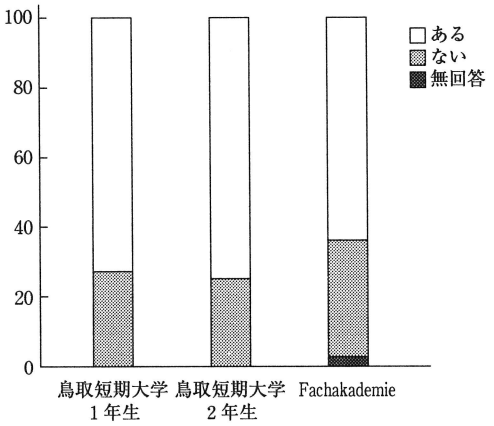

図1　入学前の楽器の習得経験

ち、ピアノの技術を習得する目的と、保育に関わる音楽教育への学生の認識が必ずしも一致していないことが指摘できる。

項目3は、それぞれ違いはあるものの、対象者全般が歌うことに興味を示しており、保育者の資質としてふさわしい一つの要素を備えていることが把握できる。

それぞれの対象者の嗜好は、鳥取短期大学の学生はポップ・ミュージック（pop music）に集中しており、さらに童謡へも高い関心が示されていた。一方、ドイツの学生の多くはすべての分野を嗜好対象としているが、子どもの歌への関心度は低く、かわって教会音楽やゴスペル・ソング（gospel song）への関心が多く示されていた。

項目4では、いずれの対象者からも音楽教育が必要であると回答されている。

必要とする理由は、鳥取短期大学の1年生と2年生とでは注目できる項目はないが、彼らが考える音楽教育は、子どもたちに歌を教えること、音楽によって子どもたちの表現力や創造性を育むことがおもに示されている。加えて、音楽でコミュニケーションをはかるという回答が他の項目においても目立っている。一方、ドイツの学生は子どもに音楽を親しませるための基礎知識として音楽教育を捉えている。このための「音楽教育」の授業は、15人前後の少人数クラスで、複数の担当者によって行われている。また、「リトミック」の授業も少人数制である。

ここで、項目2の結果とあわせて考察すると、鳥取短期大学の学生は、保育に関わる楽器を具体的に捉えるのではなく、抽象的に捉えている。つまり、子どもたちの音楽的活動および生活において、保育者が楽器を演奏することを一つの手段として捉えているものと考えられる。そのために、保育者養成における音楽教育が、方法論としてではなく実践論として捉えられている。項目3において、子どもの歌に彼らの興味、関心が示されていたのはこのような音楽教育への認識に基づいているのではなかろうか。

さらに、実践論であることは項目2の結果が示す楽器の依存度にも表れて、技術面だけが表面的に求められていると考えられる。よって、楽器を演奏する技術を優先する意識が学生に定着しているものと思われる。

項目5では、それぞれの対象者が同様の回答であり、歌うことや体を動かすこと、楽器を使用することなどが意識として表れている。これは、保育者の音楽的活動とは子どもたちの成長発達を助長するものであることが十分に認識されていると捉えることができる。

Ⅲ　まとめと今後の課題

鳥取短期大学とドイツの学生の楽器への意識は、それぞれの国の保育の現場における相違として示されている。わが国の保育者養成において、ピアノの技術習得が根強く求められている実態は、学生の楽器への依存度として表れ、そのための音楽教育であると学生に受けとめられている。このことは、ピアノが主体となっている音楽教育として、その議論が求められる。

ピアノ以外のあらゆる楽器を演奏できる喜び、また演奏することによって生まれる喜びが保育者養成において必要である。この意識改革において、保育

現場と保育者養成の両者が、子どもの生活に密着した文化的要件である音楽生活のための技能として、保育に関わる音楽教育の構造を変えていかなければならない。

その音楽教育とは、ドイツの例に見られるように、子どもと関わるうえでの音楽知識が基本であろう。ドイツの学生が学ぶ音楽教育の内容については、筆者はすでに述べた[註3)]。技術が優先して行われている傾向にあるわが国の保育者養成のための音楽教育は、子どもの音楽活動を助長するものでなければならない。その方法論を追究していくことが、これからの保育者養成における音楽教育の課題ではなかろうか。

わが国の保育者養成課程において音楽科目が削減される傾向にありながら、一方で保育者の音楽的資質が強く求められている。今回の調査において、学生の音楽教育に対する強い意識が確認できた。このためにも、今後の保育者養成における音楽教育が担う課題は大きく、内容およびその具現についてあらためて問い直す時期にきている。

註

1）羽根田真弓「幼児教育に関する一考察—ドイツの幼稚園が示唆するもの—」鳥取女子短期大学研究紀要第42号、2000および「保育者養成における音楽教育の関わり—ドイツの事例をもとに—」全国大学音楽教育学会研究紀要第12号、2001

2）羽根田真弓「日本と西ドイツにおける幼児音楽教育」鳥取女子短期大学研究紀要第14号、1985および「音楽早期教育における一考察」鳥取女子短期大学研究紀要第16号、1987

3）前掲論文

付録1

Umfrage

1. Hatten Sie in Ihrer Kindheit Musikalische Frueherziehung?
   ＊ Ja/Nein
2. Haben Sie ein Instrument gelernt?
   □Wenn ja, bitte weiterlesen.
   a）Welches Instrument haben Sie gelernt?
   b）Wielange haben Sie es gelernt?
   c）Welches Instrument haben Sie jetzt als Student gewaehlt?
   □Wenn nein, bitte weiterlesen.
   a）Welches Instrument haben Sie jetzt zu spielen begonnen?
   b）Warum haben Sie es gewaehlt?
3. Muss man als Erzieher ein Instrument spielen koennen?
   ＊ Ja/Nein
   □Wenn ja, warum?
   □Wenn nein, warum?
4. Singen Sie gern?
   ＊ Ja/Nein
   □Wenn ja, welche Lieder moegen Sie?
   □Wenn nein, warum nicht?
5. Wenn man Erzieher werden moechte, sollte man dann auch Musikerziehung lernen?
   ＊ Ja/Nein
   □Wenn ja, warum?
   □Wenn nein, warum nicht?
6. Wie wollen Sie spaeter in Ihrem Beruf mit den Kindern musizieren?